

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	978	提案区分	A 権限移譲	提案分野	環境・衛生
提案事項 (事項名)	容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律に基づく報告・立入検査・勧告・命令に係る事務・権限の移譲				
提案団体	鳥取県				
制度の所管・関係府省	環境省、経済産業省、農林水産省、厚生労働省、財務省				

求める措置の具体的内容

容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律に基づく国の報告・立入検査・勧告・命令に係る事務・権限を都道府県へ移譲する。
なお、各自治体、地域の状況は様々であることから希望する都道府県の手上げ方式とする。
権限の移譲を受けた都道府県は、希望する市町村に一般廃棄物処理関係の権限を移譲できるものとする。

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

廃棄物処理法に基づく指導監督や3R等に関する消費者への啓発等は都道府県・市町村が実施している一方、各種リサイクル法に基づく事業者への指導監督は国が行っており、一連の施策としての連携が取りにくい状況にある。
また、国の各府省が共管していることにより、縦割り行政の弊害が生じるおそれがある。
そのため、事業所が一の都道府県の区域内のみにある場合は、事務・権限を都道府県、市町村に移譲することで、事務の効率化を図ることが可能である。
その際、権限に係る事務処理基準、財源、人材等について併せて国から措置することが必要である。

根拠法令等

容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律第7条の5、第19～20条、第39～40条

特定事業者による再商品化義務の履行方法には、本法第21条第1項に基づく指定法人である公益財団法人日本容器包装リサイクル協会への再商品化費用の支払いのほか、主務大臣の認定を得て自ら再商品化を行う方法(法15条)及び主務大臣の認定を得て容器包装の自主回収を行う方法(法18条)が存在する。報告徴収・立入検査、勧告・命令等の措置は、各履行方法について整合的な判断を保ちつつ、広域的に活動している他の事業者の取組状況等も踏まえながら実施される必要があり、認定及び認定の取消しの主体である国が、全国統一的な観点から実施することが適当であることから、これらの事務を地方に移譲することは困難である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

廃棄物処理法に基づく産業廃棄物や一般廃棄物の処理に関する報告徴収・立入検査、指導・命令等の一連の是正措置については、国が示した事務処理基準や通知等を踏まえて全国統一的な観点を考慮しつつ、従前から都道府県又は市町村が実施している。同様に、容器包装リサイクル法に基づく事務についても、国が事務処理基準等を示すことで都道府県・市町村による実施が可能であり、廃棄物処理法に基づく権限と一体的に運用することで事務の効率化につながることから、移譲が必要である。

なお、法第15条又は第18条に基づく認定を受けて再商品化を行っている事業者はごく限られており、大多数は国の認定を受けずに指定法人への支払いによって義務を履行しているものと認識している。(指定法人への支払い業者:74,371者、自主回収認定業者:70者(H25.09.19中央環境審議会容器包装の3R推進に関する小委員会資料))

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

権限を受けた都道府県から市へ権限を移譲する場合は、手挙げ方式による移譲を求める。

(1)容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律の理念

容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律(平成7年法律第112号。以下「法」という。)は、容器包装廃棄物の排出の抑制並びにその分別収集及びこれにより得られた分別基準適合物の再商品化を促進するための措置を講ずること等により、一般廃棄物の減量及び再生資源の十分な利用等を通じて、廃棄物の適正な処理及び資源の有効な利用の確保を図り、もって生活環境の保全及び国民経済の健全な発展に寄与することを目的とした法律である。

法律の制定の背景には、家庭等から排出される一般廃棄物の量が増大し、その最終処分場がひっ迫しつつある等廃棄物処理をめぐる問題が深刻化していた状況に対処するため、従来、一般廃棄物として市町村において処理されてきた容器包装廃棄物について、拡大生産者責任の理念に基づき、その再商品化について容器包装を利用・製造等する全国の事業者が責任を負うこととし、容器包装廃棄物について全国的なリサイクルシステムを構築することによって、社会全体で適正かつ円滑に容器包装廃棄物の再商品化等を進めるべきとの考えがあったところ。

特定事業者による再商品化義務の履行方法には、本法第21条第1項に基づく指定法人である公益財団法人日本容器包装リサイクル協会への再商品化費用の支払いのほか、主務大臣の認定を得て自ら再商品化を行う方法(法15条)及び主務大臣の認定を得て容器包装の自主回収を行う方法(法18条)が存在する。

また、法においては、全国の特定事業者に対して全国統一的観点から再商品化義務を均質に課しており、全国の特定事業者によって、全国の容器包装廃棄物の再商品化を支えるシステムとなっている。

このため、法に基づく指導等の措置は、それぞれの履行方法による履行状況を踏まえつつ、移譲要望外と

なっている広域的に活動している他の事業者の取組状況等も踏まえながら実施される必要があり、認定及び認定の取消しの主体である国が、全国の様々な取組状況等を勘案しつつ、全国統一的な観点から実施することが適当であることから、これらの事務を地方に移譲することは困難である。

(2) 仮に、権限を移譲した場合の実態上の問題点

仮に、貴県内にのみ事業所を有する特定事業者等に対する指導・監督権限について、国から貴県に権限を移譲した場合、実態上の問題点として、以下のような事態が生じるおそれがある。

- ① 特定事業者等が他の都道府県に事業所を設けた場合、貴県は当該事業者に係る従来から貴県に存在する事業所に対する指導等の権限を失うこととなるため、各都道府県と国との間において事業所の有無について常に確認し合う必要が生じ、現在の国による対応と比較して行政コストが増大し、迅速性は阻害される。
- ② 貴県が認定特定事業者等の事業所に立ち入った結果、法違反事実を認めたとしても、認定の取消しに係る行政処分を行う権限は引き続き国が有するため、国がその判断を行うための情報を得るために都道府県への照会、協力要請等が必要となることから、現在の国による立入検査の対応と比較して行政コストが増大し迅速性が阻害される。
- ③ 全国統一的な観点からの指導等の実施を担保するためには、国との調整等が不可欠となるが、現在の国による一括的対応と比較して、行政コストが増大し迅速性が阻害される。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

[再掲]

4【厚生労働省】

(14) 容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律(平7法112)(財務省、農林水産省、経済産業省及び環境省と共管)

特定事業者等に対する指導、助言、勧告、命令、報告徴収及び立入検査については、関係する審議会において都道府県等から意見聴取を行いつつ、実施主体や国の関与等の在り方を含めた的確な執行の在り方について、原則として平成27年中に検討を行い、その結果に基づいて必要な措置を講ずる。

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	450	提案区分	A 権限移譲	提案分野	環境・衛生
提案事項 (事項名)	養成施設の指定の移譲(栄養士)				
提案団体	神奈川県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

栄養士養成施設に関しては、現在地方厚生局が行う、養成施設の指定、取消し、内容変更、廃止、指導調査等の事務を県で行うことが可能であり、権限を県に移譲することを求める。

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

管理栄養士養成施設(栄養学科系の4年制大学)は、同時に栄養士養成施設も兼ねている。今後も管理栄養士養成施設に関しては、大学に対する設置認可権は国(文部科学省)と同様に、国(厚生労働省)に指定権限が残る。栄養士養成施設の指定権限が県に移譲されると、国と県が一つの養成施設に対して、同時に指定権限を持つ状態になる。
そういった事情から、現在管理栄養士養成施設をもつ栄養士養成施設については、事務権限の移譲が可能かどうか、国が調整を行っている段階である。

根拠法令等

栄養士法第2条第1項、栄養士法施行令等、栄養士法施行規則等、栄養士養成施設指導要領等

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

栄養士養成施設に関しては、「事務・権限の移譲等に関する見直し方針について」(平成25年12月20日閣議決定)において、今後の管理栄養士に係る養成施設と栄養士に係る養成施設の配置状況を踏まえ、検討を進めることとしており、現時点では困難である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

・見直し方針に基づいて検討を進めるとしているが、栄養士養成施設に係る指定権限の移譲が必要であると
する地方のニーズに基づく意見も十分に聴取した上で、速やかな移譲を求める。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】
提案団体の意見を十分に尊重されたい。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

栄養士養成施設に関しては、「事務・権限の移譲等に関する見直し方針について」(平成25年12月20日閣議決定)において、今後の管理栄養士に係る養成施設と栄養士に係る養成施設の配置状況を踏まえ、検討を進めることとしており、現時点では困難である。

また、栄養士養成施設に係る権限移譲については、関係団体から提案団体に、強い反対の意見が出ているところである。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号 提案区分 提案分野

提案事項
(事項名)

提案団体

制度の所管・関係府省

求める措置の具体的内容

事業者等の各都道府県内事務所への食品リサイクル法に基づく立入検査、報告徴収等以下の権限を、必要となる人員、財源とともに、国から都道府県へ移譲すること。(大臣・知事の並行権限とする)
事業者等への立入検査、報告徴収
事業者等への指導、公表、助言
事業者等への勧告、命令

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【現行・支障事例】
本県の廃棄物処理計画では、リサイクル率の目標を定めているが、目標達成のために事業者を指導する権限はないことから、報告徴収、立入検査を実施するにしても、国に協力を依頼しなければならない。また、立入検査を実施したとしても、指導、助言等の権限が無ければ実効性がない。現状では、立入検査、報告徴収等の権限がないため、支障があっても把握できない。(具体的に問題が表面化してから後追いで状況把握、対応を行うなどすることを懸念し、提案するものである。)

【改正による効果】
都道府県内のすべての事務所に対する報告徴収、立入検査とあわせ、指導、助言等の権限についても都道府県に移譲することで、元々廃棄物であり、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」に基づく権限を有する県として、適正に処理されているかどうかを確認することが可能となり、事業者への統一的な指導を実施することができる。また、大臣と並行権限とすることで、合同で立入検査を行うとともに、指導、助言、勧告、命令を行うにあたり、事前に大臣と調整することで、統一的な運用を担保できるようにする。審議会の意見聴取についても、主務大臣が行うこととする。

根拠法令等

報告徴収・立入検査、指導・公表・助言、勧告・命令等の一連の是正措置は、食品リサイクル法の法目的を達成するため、広域的に活動している事業者も含めた他の事業者の取組状況や、近隣の県域も含めた再生利用事業者の状況など、食品循環資源を取り巻くその時点における全国的な状況も踏まえながら、全国統一的な観点から実施される必要があり、引き続き国による実施が求められることから、これらの権限を地方に移譲することは困難である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

・廃掃法に基づく権限を有する県として、適正に処理されているかどうかを確認することが可能となり、事業者への統一的な指導を実施することができる。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

各府省からの第2次回答

(1)食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律の理念

食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律(平成12年法律第116号。以下、「法」という。)は、食品の売れ残りや食べ残しにより、又は食品の製造過程において大量に発生している食品残さについて、国の基本方針及び食品関連事業者の判断の基準となるべき事項を定め、当該事項を遵守させるための措置を講ずるとともに、再生利用事業者の登録制度その他食品循環資源の再生利用等を促進するための措置を講ずることにより、食品に係る資源の有効な利用の確保及び食品に係る廃棄物の排出の抑制を図るとともに、食品の製造等の事業の健全な発展を促進し、もって生活環境の保全及び国民経済の健全な発展に寄与することを目的とした法律である。

法律の制定の背景には、廃棄物の最終処分場のひっ迫等、廃棄物問題に係る深刻化が進む中で、食品の製造等の過程等において生ずる食品残さが大量に排出され、資源として有効利用できるにもかかわらず、その大部分が焼却されていた状況を踏まえ、国全体で食品残さの再生利用等の促進を図るため、国が全国的な食品残さの発生状況等を踏まえながら、全国統一的な観点から取り組むべき目標等を定めつつ、全国の事業者に対して取組を促していくべきとの考えがあったところ。

食品関連事業者は、主務大臣が定める判断の基準となるべき事項に従い、再生利用に取り組むこととされている。判断の基準となるべき事項には、再生利用等の実施の原則、食品循環資源の再生利用等の実施に関する目標、発生抑制の方法等について定められており、この事項は、食品廃棄物等を多量に発生させる食品関連事業者が、主務大臣に毎年度報告する、食品廃棄物等の発生量や再生利用等の取組状況を踏まえて決定される。

また、食品リサイクルを促進するため、食品循環資源の肥料化等を行う事業者等に対しては、廃棄物処理法の特例を設けている。これは、食品残さは散在する食品関連事業者の事業場で少量ずつ排出されるという特性を有している一方、再資源化を効率的に行っていくためにはある程度のまとまりが必要である中、市町村ごとに必要とされる廃棄物処理法上の許可を不要とすることで、広域にわたる事業場から再生利用事業を行う者が食品残さを調達しやすくするという考えに基づくものである。

したがって、本法は、住民に最も身近な市町村単位で、地域の実情に応じて適正に処理されることとなる一般廃棄物処理や、都道府県等の一定の規制の下、民間の自由な競争・契約によって処理される産業廃棄物処理とは異なり、国が、全国規模で製造、流通、消費される食品及びその廃棄物の現状について把握し、国の基本方針及び食品関連事業の判断の基準となるべき事項等を検討する必要がある。

これらの食品リサイクル法の目的やその性質を鑑みれば、食品関連事業者等の義務の履行状況等にかかる指導・監督権限について、都道府県や市町村の区域で細分化して実施することとする場合には同法に基づく制度全体を根本から変更しなければならないと考えられる。

(2) 仮に、権限を移譲した場合の実態上の問題点

仮に、貴県が、食品関連事業者等に立入検査を実施した場合、

① 食品関連事業者等が他の都道府県に事業所を設けた場合、貴県は当該事業者に係る従来から貴県に存在する事業所に対する指導等の権限を失うこととなるため、都道府県と国において事業所の有無について常に確認し合う必要が生じ、現在の国による対応と比較して行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

② 再生利用事業計画の認定に関しては、食品循環資源を用いた特定肥飼料等の製造から利用、それにより生産された農畜水産物等の利用についての一連の計画を認定している。そのため、再生利用事業計画に基づき行われる食品循環資源の再生利用については、参加業者や施設、事業範囲について一定程度の広がりが見込まれており、また、製造、流通、再生利用など段階により指導対象も異なるため、指導方針も多岐にわたる。よって、認定された再生利用事業計画に沿って実施しているかの確認にあたっては、場合によっては、複数の都道府県での処理において、一連の処理として整合がとれているかの確認が必要である。同様に、食品関連事業者において、熱回収が認められる条件の1つとして、食品残さを排出する事業場から75km圏内に再生利用施設が存在しないこと等があるが、この判断については、多くの都道府県について、他の都道府県における施設の設置状況等についての確認が必要となる。このように、一の都道府県ごとでは確認が困難となる事態が想定される。また、都道府県等間の照会・協力要請等で対応するとしても、複数の都道府県の間でその都度相互に確認し合う必要が生じ、現在の農林水産省及び環境省を中心とした立入検査の対応と比較して、かえって行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

③ 貴県が登録再生利用事業者や認定事業者等の事業所に立ち入った結果、法違反事実を認めたとしても、登録及び認定の取消しに係る行政処分を行う権限は引き続き国が有するため、国がその判断を行うための情報を得るために都道府県への照会、協力要請等が必要となることから、現在の国による立入検査の対応と比較して行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

④ 食品関連事業者による再生利用等の実施、登録再生利用事業者による再生利用事業の実施、認定事業者による再生利用事業計画に基づく事業の実施は、それぞれ、食品関連事業者の判断基準、再生利用事業を行う者の登録に関する省令、再生利用事業計画の認定に関する省令等に沿ったものとなっているが、それによって再生利用等が適切になされているかの判断については、都道府県ごとに対応のばらつきが懸念され、事業者間に不公平や指導等のずれが生じるおそれがあるとともに、結果として食品循環資源の適正な再生利用がなされず、国益を損なうおそれがある。仮に、判断がばらついた場合に、国に照会し、その上で関係自治体の間で調整等を行うのであれば、行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

4【厚生労働省】

(15) 食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律(平12法116)(財務省、農林水産省、経済産業省、国土交通省及び環境省と共管)

食品関連事業者等に対する指導、助言、勧告、命令、報告徴収及び立入検査については、関係する審議会において都道府県等から意見聴取を行いつつ、実施主体や国の関与等の在り方を含めた的確な執行の在り方について、原則として平成27年中に検討を行い、その結果に基づいて必要な措置を講ずる。

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号 提案区分 提案分野

提案事項
(事項名)

提案団体

制度の所管・関係府省

求める措置の具体的内容

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

根拠法令等

報告徴収・立入検査、指導・助言、勧告・命令等の一連の是正措置は、食品リサイクル法の法目的を達成するため、広域的に活動している事業者も含めた他の事業者の取組状況や、近隣の県域も含めた再生利用事業者の状況など、食品循環資源を取り巻くその時点における全国的な状況も踏まえながら、全国統一的な観点から実施される必要があり、引き続き国による実施が求められることから、これらの権限を地方に移譲することは困難である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

現在、各地方厚生(支)局長に委任されている報告徴収・立入検査に関しては、従前より一都道府県を越えない場合は各都道府県への移譲も検討可能とされてきたものであり、これを関西広域連合の区域内に拡大しても条件の違いはないと考える。

また、指導・助言、勧告・命令等の措置については、国による統一性の確保のための基準の設定および専門的・技術的な支援があれば、広域連合でも対応は可能と考える。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

各府省からの第2次回答

(1)食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律の理念

食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律(平成12年法律第116号。以下、「法」という。)は、食品の売れ残りや食べ残しにより、又は食品の製造過程において大量に発生している食品残さについて、国の基本方針及び食品関連事業者の判断の基準となるべき事項を定め、当該事項を遵守させるための措置を講ずるとともに、再生利用事業者の登録制度その他食品循環資源の再生利用等を促進するための措置を講ずることにより、食品に係る資源の有効な利用の確保及び食品に係る廃棄物の排出の抑制を図るとともに、食品の製造等の事業の健全な発展を促進し、もって生活環境の保全及び国民経済の健全な発展に寄与することを目的とした法律である。

法律の制定の背景には、廃棄物の最終処分場のひっ迫等、廃棄物問題に係る深刻化が進む中で、食品の製造等の過程等において生ずる食品残さが大量に排出され、資源として有効利用できるにもかかわらず、その大部分が焼却されていた状況を踏まえ、国全体で食品残さの再生利用等の促進を図るため、国が全国的な食品残さの発生状況等を踏まえながら、全国統一的な観点から取り組むべき目標等を定めつつ、全国の事業者に対して取組を促していくべきとの考えがあったところ。

食品関連事業者は、主務大臣が定める判断の基準となるべき事項に従い、再生利用に取り組むこととされている。判断の基準となるべき事項には、再生利用等の実施の原則、食品循環資源の再生利用等の実施に関する目標、発生抑制の方法等について定められており、この事項は、食品廃棄物等を多量に発生させる食品関連事業者が、主務大臣に毎年度報告する、食品廃棄物等の発生量や再生利用等の取組状況を踏まえて決定される。

また、食品リサイクルを促進するため、食品循環資源の肥料化等を行う事業者等に対しては、廃棄物処理法の特例を設けている。これは、食品残さは散在する食品関連事業者の事業場で少量ずつ排出されるという特性を有している一方、再資源化を効率的に行っていくためにはある程度のまとまりが必要である中、市町村ごとに必要とされる廃棄物処理法上の許可を不要とすることで、広域にわたる事業場から再生利用事業を行う者が食品残さを調達しやすくするという考えに基づくものである。

したがって、本法は、住民に最も身近な市町村単位で、地域の実情に応じて適正に処理されることとなる一般廃棄物処理や、都道府県等の一定の規制の下、民間の自由な競争・契約によって処理される産業廃棄物処理とは異なり、国が、全国規模で製造、流通、消費される食品及びその廃棄物の現状について把握し、国の基本方針及び食品関連事業の判断の基準となるべき事項等を検討する必要がある。

これらの食品リサイクル法の目的やその性質を鑑みれば、食品関連事業者等の義務の履行状況等にかか

る指導・監督権限について、都道府県や市町村の区域で細分化して実施することとする場合には同法に基づく制度全体を根本から変更しなければならないと考えられる。

(2) 仮に、権限を移譲した場合の実態上の問題点

仮に、貴広域連合が、食品関連事業者等に立入検査を実施した場合、

① 食品関連事業者等が他の都道府県に事業所を設けた場合、貴広域連合は当該事業者に係る従来から貴広域連合に存在する事業所に対する指導等の権限を失うこととなるため、都道府県と国において事業所の有無について常に確認し合う必要が生じ、現在の国による対応と比較して行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

② 再生利用事業計画の認定に関しては、食品循環資源を用いた特定肥飼料等の製造から利用、それにより生産された農畜水産物等の利用についての一連の計画を認定している。そのため、再生利用事業計画に基づき行われる食品循環資源の再生利用については、参加業者や施設、事業範囲について一定程度の広がりが見込まれており、また、製造、流通、再生利用など段階により指導対象も異なるため、指導方針も多岐にわたる。よって、認定された再生利用事業計画に沿って実施しているかの確認にあたっては、場合によっては、複数の都道府県または広域連合（以下「都道府県等」という。）での処理において、一連の処理として整合がとれているかの確認が必要である。同様に、食品関連事業者において、熱回収が認められる条件の1つとして、食品残さを排出する事業場から75km圏内に再生利用施設が存在しないこと等があるが、この判断については、多くの都道府県等について、他の都道府県等における施設の設置状況等についての確認が必要となる。このように、一の都道府県等ごとでは確認が困難となる事態が想定される。また、都道府県等間の照会・協力要請等でも対応するとしても、複数の都道府県等の中でその都度相互に確認し合う必要が生じ、現在の農林水産省及び環境省を中心とした立入検査の対応と比較して、かえって行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

③ 貴広域連合が登録再生利用事業者や認定事業者等の事業所に立ち入った結果、法違反事実を認めたとしても、登録及び認定の取消しに係る行政処分を行う権限は引き続き国が有するため、国がその判断を行うための情報を得るために都道府県等への照会、協力要請等が必要となることから、現在の国による立入検査の対応と比較して行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

④ 食品関連事業者による再生利用等の実施、登録再生利用事業者による再生利用事業の実施、認定事業者による再生利用事業計画に基づく事業の実施は、それぞれ、食品関連事業者の判断基準、再生利用事業を行う者の登録に関する省令、再生利用事業計画の認定に関する省令等に沿ったものとなっているが、それに沿って再生利用等が適切になされているかの判断については、都道府県等ごとに対応のばらつきが懸念され、事業者間に不公平や指導等のずれが生じるおそれがあるとともに、結果として食品循環資源の適正な再生利用がなされず、国益を損なうおそれがある。仮に、判断がばらついた場合に、国に照会し、その上で関係自治体の間で調整等を行うのであれば、行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

[再掲]

4【厚生労働省】

(15) 食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律(平12法116)(財務省、農林水産省、経済産業省、国土交通省及び環境省と共管)

食品関連事業者等に対する指導、助言、勧告、命令、報告徴収及び立入検査については、関係する審議会において都道府県等から意見聴取を行いつつ、実施主体や国の関与等の在り方を含めた的確な執行の在り方について、原則として平成27年中に検討を行い、その結果に基づいて必要な措置を講ずる。

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	979	提案区分	A 権限移譲	提案分野	環境・衛生
提案事項 (事項名)	食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律に基づく報告・立入検査・勧告・命令に係る事務・権限の移譲				
提案団体	鳥取県				
制度の所管・関係府省	農林水産省、環境省、経済産業省、国土交通省、財務省、厚生労働省				

求める措置の具体的内容

食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律に基づく国の報告・立入検査・勧告・命令に係る事務・権限を都道府県へ移譲する。
なお、各自治体、地域の状況は様々であることから希望する都道府県の手上げ方式とする。
権限の移譲を受けた都道府県は、希望する市町村に一般廃棄物処理関係の権限を移譲できるものとする。

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

廃棄物処理法に基づく指導監督や3R等に関する消費者への啓発等は都道府県・市町村が実施している一方、各種リサイクル法に基づく事業者への指導監督は国が行っており、一連の施策としての連携が取りにくい状況にある。
また、国の各府省が共管していることにより、縦割り行政の弊害が生じるおそれがある。
そのため、事業所が一の都道府県の区域内のみにある場合は、事務・権限を都道府県、市町村に移譲することで、事務の効率化を図ることが可能である。
その際、権限に係る事務処理基準、財源、人材等について併せて国から措置することが必要である。

根拠法令等

食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律第8条、第24条

報告徴収・立入検査、勧告・命令等の一連の是正措置は、食品リサイクル法の法目的を達成するため、広域的に活動している事業者も含めた他の事業者の取組状況や、近隣の県域も含めた再生利用事業者の状況など、食品循環資源を取り巻くその時点における全国的な状況も踏まえながら、全国統一的な観点から実施される必要があり、引き続き国による実施が求められることから、これらの権限を地方に移譲することは困難である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

廃棄物処理法に基づく産業廃棄物や一般廃棄物の処理に関する報告徴収・立入検査、指導・命令等の一連の是正措置については、国が示した事務処理基準や通知等を踏まえて全国統一的な観点を考慮しつつ、従前から都道府県又は市町村が実施している。同様に、食品リサイクル法に基づく事務についても、国が事務処理基準等を示すことで都道府県・市町村による実施が可能であり、廃棄物処理法に基づく権限と一体的に運用することで事務の効率化につながることから、移譲が必要である。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

権限を受けた都道府県から市へ権限を移譲する場合は、手挙げ方式による移譲を求める。

(1)食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律の理念

食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律(平成12年法律第116号。以下、「法」という。)は、食品の売れ残りや食べ残しにより、又は食品の製造過程において大量に発生している食品残さについて、国の基本方針及び食品関連事業者の判断の基準となるべき事項を定め、当該事項を遵守させるための措置を講ずるとともに、再生利用事業者の登録制度その他食品循環資源の再生利用等を促進するための措置を講ずることにより、食品に係る資源の有効な利用の確保及び食品に係る廃棄物の排出の抑制を図るとともに、食品の製造等の事業の健全な発展を促進し、もって生活環境の保全及び国民経済の健全な発展に寄与することを目的とした法律である。

法律の制定の背景には、廃棄物の最終処分場のひっ迫等、廃棄物問題に係る深刻化が進む中で、食品の製造等の過程等において生ずる食品残さが大量に排出され、資源として有効利用できるにもかかわらず、その大部分が焼却されていた状況を踏まえ、国全体で食品残さの再生利用等の促進を図るため、国が全国的な食品残さの発生状況等を踏まえながら、全国統一的な観点から取り組むべき目標等を定めつつ、全国の事業者に対して取組を促していくべきとの考えがあったところ。

食品関連事業者は、主務大臣が定める判断の基準となるべき事項に従い、再生利用に取り組むこととされている。判断の基準となるべき事項には、再生利用等の実施の原則、食品循環資源の再生利用等の実施に関する目標、発生抑制の方法等について定められており、この事項は、食品廃棄物等を多量に発生させる食品関連事業者が、主務大臣に毎年度報告する、食品廃棄物等の発生量や再生利用等の取組状況を踏まえて決定される。

また、食品リサイクルを促進するため、食品循環資源の肥料化等を行う事業者等に対しては、廃棄物処理法の特例を設けている。これは、食品残さは散在する食品関連事業者の事業場で少量ずつ排出されるという特性を有している一方、再資源化を効率的に行っていくためにはある程度のまとまりが必要である中、市町村ごとに必要とされる廃棄物処理法上の許可を不要とすることで、広域にわたる事業場から再生利用事業を行う者が食品残さを調達しやすくするという考えに基づくものである。

したがって、本法は、住民に最も身近な市町村単位で、地域の実情に応じて適正に処理されることとなる一

般廃棄物処理や、都道府県等の一定の規制の下、民間の自由な競争・契約によって処理される産業廃棄物処理とは異なり、国が、全国規模で製造、流通、消費される食品及びその廃棄物の現状について把握し、国の基本方針及び食品関連事業の判断の基準となるべき事項等を検討する必要がある。

これらの食品リサイクル法の目的やその性質を鑑みれば、食品関連事業者等の義務の履行状況等にかかる指導・監督権限について、都道府県や市町村の区域で細分化して実施することとする場合には同法に基づく制度全体を根本から変更しなければならないと考えられる。

(2) 仮に、権限を移譲した場合の実態上の問題点

仮に、貴県が、食品関連事業者等に立入検査を実施した場合、

① 食品関連事業者等が他の都道府県に事業所を設けた場合、貴県は当該事業者に係る従来から貴県に存在する事業所に対する指導等の権限を失うこととなるため、都道府県と国において事業所の有無について常に確認し合う必要が生じ、現在の国による対応と比較して行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

② 再生利用事業計画の認定に関しては、食品循環資源を用いた特定肥飼料等の製造から利用、それにより生産された農畜水産物等の利用についての一連の計画を認定している。そのため、再生利用事業計画に基づき行われる食品循環資源の再生利用については、参加業者や施設、事業範囲について一定程度の広がりが見込まれており、また、製造、流通、再生利用など段階により指導対象も異なるため、指導方針も多岐にわたる。よって、認定された再生利用事業計画に沿って実施しているかの確認にあたっては、場合によっては、複数の都道府県での処理において、一連の処理として整合がとれているかの確認が必要である。同様に、食品関連事業者において、熱回収が認められる条件の1つとして、食品残さを排出する事業場から75km圏内に再生利用施設が存在しないこと等があるが、この判断については、多くの都道府県について、他の都道府県における施設の設置状況等についての確認が必要となる。このように、一の都道府県ごとでは確認が困難となる事態が想定される。また、都道府県等間の照会・協力要請等で対応するとしても、複数の都道府県の間でその都度相互に確認し合う必要が生じ、現在の農林水産省及び環境省を中心とした立入検査の対応と比較して、かえって行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

③ 貴県が登録再生利用事業者や認定事業者等の事業所に立ち入った結果、法違反事実を認めたとしても、登録及び認定の取消しに係る行政処分を行う権限は引き続き国が有するため、国がその判断を行うための情報を得るために都道府県への照会、協力要請等が必要となることから、現在の国による立入検査の対応と比較して行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

④ 食品関連事業者による再生利用等の実施、登録再生利用事業者による再生利用事業の実施、認定事業者による再生利用事業計画に基づく事業の実施は、それぞれ、食品関連事業者の判断基準、再生利用事業を行う者の登録に関する省令、再生利用事業計画の認定に関する省令等に沿ったものとなっているが、それに沿って再生利用等が適切になされているかの判断については、都道府県ごとに対応のばらつきが懸念され、事業者間に不公平や指導等のずれが生じるおそれがあるとともに、結果として食品循環資源の適正な再生利用がなされず、国益を損なうおそれがある。仮に、判断がばらついた場合に、国に照会し、その上で関係自治体の間で調整等を行うのであれば、行政コストの増大及び迅速性の阻害が予想される。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

[再掲]

4【厚生労働省】

(15) 食品循環資源の再生利用等の促進に関する法律(平12法116)(財務省、農林水産省、経済産業省、国土交通省及び環境省と共管)

食品関連事業者等に対する指導、助言、勧告、命令、報告徴収及び立入検査については、関係する審議会において都道府県等から意見聴取を行いつつ、実施主体や国の関与等の在り方を含めた的確な執行の在り方について、原則として平成27年中に検討を行い、その結果に基づいて必要な措置を講ずる。

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号 776 提案区分 A 権限移譲 提案分野 環境・衛生

提案事項
(事項名) 資源有効利用促進法に基づく権限の都道府県への移譲

提案団体 兵庫県、徳島県

制度の所管・関係府省
経済産業省、環境省、財務省、厚生労働省、国土交通省、農林水産省

求める措置の具体的内容

事業者等の各都道府県内事務所への資源有効利用促進法に基づく立入検査、報告徴収等以下の権限を、必要となる人員、財源とともに、国から都道府県へ移譲すること。(大臣・知事の並行権限とする)
事業者等への立入検査、報告徴収
事業者等への指導、助言
事業者等への勧告、公表、命令

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【現行・支障事例】
本県の廃棄物処理計画では、リサイクル率の目標を定めているが、目標達成のために事業者を指導する権限はないことから、報告徴収、立入検査を実施するにしても、国に協力を依頼しなければならない。また、立入検査を実施したとしても、指導、助言等の権限が無ければ実効性がない。現状では、立入検査、報告徴収等の権限がないため、支障があっても把握できない。(具体的に問題が表面化してから後追いで状況把握、対応を行うなどすることを懸念し、提案するものである。)

【改正による効果】
都道府県内のすべての事務所に対する報告徴収、立入検査とあわせ、指導、助言等の権限についても都道府県に移譲することで、元々廃棄物であり、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」に基づく権限を有する県として、適正に処理されているかどうかを確認することが可能となり、事業者への統一的な指導を実施することができる。また、大臣と並行権限とすることで、合同で立入検査を行うとともに、指導、助言、勧告、命令を行うにあたり、事前に大臣と調整することで、統一的な運用を担保できるようにする。審議会の意見聴取についても、主務大臣が行うこととする。

なお、指定表示事業者に対して、県独自の表示を勧告、公表、命令するものではない。

根拠法令等

資源有効利用促進法第11条、第13条、第16条、第17条、第19条、第20条、第22条、第23条、第25条、第32条、第33条、第35条、第36条、第37条

同法目的を達成するため、国が全国統一的な観点から報告徴収・立入検査、指導・助言、勧告・公表・命令等を行う必要があり、これら権限を委譲することは困難である。命令に当たっては、主務大臣は産業構造審議会等の意見を聴いて行うこととされており、社会的妥当性を確保するため、慎重な検討が求められることから、国が統一して行うことを法が予定している。

なお、同法は、指定表示製品の販売等を行う者に対して、統一的な表示の標準を示し、その遵守を求めているところ、他の事業者の取り組み状況等を踏まえ、全国統一的な観点から国がこれら措置を行うことが適当である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

・廃掃法に基づく権限を有する県として、適正に処理されているかどうかを確認することが可能となり、事業者への統一的な指導を実施することができる。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

各府省からの第2次回答

(1)資源の有効な利用の促進に関する法律の理念

資源の有効な利用の促進に関する法律(平成3年法律第48号。以下「資源法」という。)は、使用済物品等及び副産物の発生の抑制並びに再生資源及び再生部品の利用による資源の有効利用を総合的かつ計画的に推進することを目的とした法律である。

具体的には、製品の製造段階における3R対策、設計段階における3Rの配慮(原材料の使用の合理化、長期使用の促進、構造の工夫等)、製造事業者等による自主回収・リサイクルシステムの構築など製造事業者等として取り組むべき事項を主務省令(「判断の基準となるべき事項」として定めており、住民に最も身近な自治体において地域の実情に応じて適正に処理する廃棄物処理とは異なり、製造事業者等が全国単位(製品の製造及び流通は一地域内で完結するものではない)で3Rを実施することを目的としたものである。したがって、製造事業者等における義務の履行状況に係る指導・監督権限について、都道府県や市町村の区域で細分化して実施することとする場合には、同法に基づく制度全体を根本から変更しなければならないと考えられる。

(2)仮に、権限を移譲した場合の実態上の問題点

仮に、貴県内にのみ事業所を有する製造事業者等に対する指導・監督権限について、国から貴県に権限を移譲した場合、実態上の問題点として、以下のような事態が生じるおそれがある。

① 製造事業者等が他の都道府県に事業所を設けた場合、貴県は当該事業者に係る従来から貴県に存在する事業所に対する指導等の権限を失うこととなるため、各都道府県と国との間において事業所の有無について常に確認し合う必要が生じ、現在の国による対応と比較して行政コストが増大する。

② 製造事業者等が複数の都道府県に事業所を設けた場合、権限を移譲された複数の都道府県がそれぞれに設けられた事業所に指導等を行うことになる。

資源法に基づく指導等は、技術の進捗等を総合的に判断した上で行うため、事業所のある都道府県全てで統一的な指導が行えず、製造事業者等の大きな混乱を招く。

③ 製造事業者等の事業所に立ち入った結果、製造事業者等の取組が不十分と考えられる事実があった場合、指導等を行うか否かに関して都道府県ごとに判断することによる対応のばらつきが懸念され、結果として製造業者等に対して過剰な不利益を及ぼす恐れがある。仮に、当該判断がばらついた場合に、国に照会し、その上で関係自治体の間で調整等を行うのであれば、現在の国による立入検査等の対応と比較して行政コストが増大する。

4【厚生労働省】

(13)資源の有効な利用の促進に関する法律(平3法48)(財務省、農林水産省、経済産業省、国土交通省及び環境省と共管)

特定省資源事業者等に対する指導、助言、勧告、命令、報告徴収及び立入検査については、関係する審議会において都道府県等から意見聴取を行いつつ、実施主体や国の関与等の在り方を含めた的確な執行の在り方について、原則として平成27年中に検討を行い、その結果に基づいて必要な措置を講ずる。

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	368	提案区分	A 権限移譲	提案分野	産業振興
提案事項 (事項名)	省エネ法に基づく特定事業者等に対する指導・助言、報告徴収、立入検査の都道府県への権限移譲				
提案団体	九州地方知事会				
制度の所管・関係府省	経済産業省、農林水産省、国土交通省、警察庁、金融庁、総務省、財務省、文部科学省、厚生労働省、環境省				

求める措置の具体的内容

エネルギーの使用の合理化に関する法律に基づく指導・助言、報告徴収及び立入検査権限を、並行権限として、希望する都道府県に移譲すること。

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【必要性】エネルギー政策基本法第6条においては、「地方公共団体は、基本方針にのっとり、エネルギーの需給に関し、国の施策に準じて施策を講ずるとともに、その区域の実状に応じた施策を策定し、及び実施する責務を有する。」こととされている。地方公共団体は、本規定に基づき、特に地域として取り組むべき「エネルギー使用の合理化(省エネルギー)の促進」「再生可能エネルギーの普及」の施策の充実等に努めている。

これらの取り組みをより効果的なものとするため、「エネルギーの使用の合理化に関する法律」に基づく、特定事業者等に対する指導・助言、報告徴収及び立入検査権限を、並行権限として、都道府県に移譲する必要がある。

【具体的な効果】地方公共団体においては、省エネルギー促進のための取り組みを行っているが、地域におけるエネルギーの使用状況等を把握することができないため対象を重点化等することができず、また指導・助言する権限もないため、取組の成果が限定的となっている。例えば、本県においては、工場・事業場等の省エネルギー診断事業を無料で行っているが、エネルギー多消費事業者の情報を把握し、これら事業者に対し省エネ診断の活用を指導・助言することが可能となれば、地域内におけるエネルギー使用の合理化が大幅に進むことが期待される。

【効果的な取組みとするための工夫】「求める措置の具体的内容」にあわせて、当該法令に基づき国において収集した事業者等情報を、都道府県の求めに応じ提供することで、より効果的な取組とすることができる。

根拠法令等

エネルギーの使用の合理化に関する法律第6条、第53条、第60条、第67条、第87条

前回の検討過程において、平成25年11月22日付けで、全国知事会から、一の都道府県で完結する特定事業者等に対する指導・助言、報告徴収・立入検査に関する権限の委譲の受け入れが困難である旨示されている。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

昨年度検討されたのは「全国一律・一斉の権限移譲」であるが、全国知事会と各府省の見解が一致せず、権限移譲が実現しなかったものである。本年度の提案は、全国一律・一斉の権限移譲ではなく、「希望する自治体への権限移譲」であり、昨年度の結論をもって拒否することは不適切と考える。

本会としては、手挙げ方式で行うことにより、全国知事会の主張する包括移譲の必要性も具体的に検証できるものとする。

全国知事会からの意見

・指導、助言、報告徴収、立入検査の権限のほか、特定事業者等の指定、定期報告書の受理、中長期計画書の受理や合理化計画に係る指示及び命令などの権限についても包括的に移譲すべきであり、全国一律の制度化に向け、問題点等を検証するために、手挙げ方式や社会実験による実現を検討すべきである。
・自治事務に区分されるものと考えられるため、国による指示権は原則認められず、また、基準の設定については、義務付け・枠付けのメルクマールの範囲内とすべき。
・なお、平成25年11月22日付け文書では、権限移譲後の責任ある対応を取ることができない報告徴収・立入検査等の事務のみの受け入れについて困難と記載したものを。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】
提案団体の意見を十分に尊重されたい。

1. エネルギーに係る施策は、我が国の経済活動に欠くことのできないエネルギーを安定的に供給することが目的であり、海外から安定的に燃料を調達する施策と、燃料資源を有効に利用するための施策とで構成されている。後者の規制が省エネ法であり、エネルギーを使用する事業者に対して一定の義務を課している。
2. 国は省エネ法の目的にある「エネルギーの使用の合理化を総合的に推進する」ため、「事業者全体の状況」と「個々の事業者の状況」の両者を踏まえて事業者の取組を評価し、指導や立入検査等を実施する必要がある。このため、国の指示権の行使及び統一的な基準に基づく運用は必須である。
3. また、特定事業者等の指定、定期報告書の受理、中長期計画書の受理や合理化計画に係る指示及び命令などの権限を移譲した場合、事業者全体の状況を把握し、勘案した上での事務を実施することが不可能となる。
4. さらに、省エネ法では、事業者における省エネルギー対策の強化を図る観点から、事業者が複数の所在地に設置している全ての事業所について全体としての効率的かつ効果的な省エネルギー対策の実施を義務付けるため、事業者単位での規制を行っているところであるが、今回の九州知事会の提案のように、自治体が自らの管内の事業所のみを対象として立入検査等を行う場合、複数の都道府県に事業所を有する事業者にとっては、同一事業者でも事業所ごとに立入検査等を行う主体が異なることとなり、法の趣旨に反する。この際、全国知事会の意見のように国の指示権を認めず自治体毎に異なる運用が行われた場合は特に、事業者の混乱を招くおそれがある。また、自らの管内に本社がある事業者が有する他自治体の事業所を対象として立入検査等を行う場合は、当該事業所が立地する自治体又は国との調整が不可欠であり、現実的で

はない。

5. 加えて、手挙げ方式により都道府県に権限を移譲し、全国知事会の意見のように国の指示権を認めない場合は、対象事業者の範囲に関わらず当該「事業者全体の状況」を踏まえた対応が困難であり、法目的の達成が困難となる。

6. 以上のことから、移譲の対象とはできない。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

4【厚生労働省】

(10)エネルギーの使用の合理化等に関する法律(昭54法49)(警察庁、金融庁、総務省、財務省、文部科学省、農林水産省、経済産業省、国土交通省及び環境省と共管)[再掲]

特定事業者等(事業所等が一の都道府県の区域内のみにあるものに限る。)に対する指導、助言、報告徴収及び立入検査については、関係する審議会において都道府県等から意見聴取を行いつつ、実施主体や国の関与等の在り方について、平成27年中に検討を行い、その結果に基づいて必要な措置を講ずる。

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	116	提案区分	B 地方に対する規制緩和	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	補助金返還要件の緩和(各省庁の財産処分基準の見直し)				
提案団体	三豊市				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

現在、施設の売却等の財産処分にあたっては「補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律」及び所管行政庁の財産処分承認基準により、補助金の返還が余儀なくされている。
多くの遊休化・老朽化した施設の有効活用を検討していく中で、それが弊害となり、民間への売却等に際し、契約交渉の過程において不利になるため、財産処分承認基準を見直し、有償譲渡や有償貸付の場合であっても、補助金返還を求めず、事務処理の簡素化を図ってほしい。

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の経緯】
全国の多くの自治体は、平成の合併後、約10年が過ぎようとしており、合併に伴う施設管理の増数増大化や更新費用の問題が喫緊の課題となっている。しかしながら、各所管省庁の「補助金等に係る財産処分基準」により補助金返還が余儀なくされており、施設運用計画にも大きく影響をきたしている。

【支障事例及び解消策】
事例として、今年度、市では厚生労働省所管の施設である「三豊市豊中町南福祉ふれあいセンター」の有償譲渡を行う予定だが、鉄骨建造物であれば処分制限期間が47年ということになっており、老朽化建造物であっても残存算定され、期間相応分の補助金が返還請求されることとなる。企業や自治会などへの売却活用にあたっては、価格交渉において補助金返還額も考慮しなければならず、市町村が公共施設再配置計画に基づき、施設の統廃合等の検討を進めるにあたり、財産処分基準中にある「有償譲渡及び有償貸付を除く」という部分が弊害となり、契約交渉において不利になっている。

【制度改正の必要性】
三豊市では、議会特別委員会での協議やパブリックコメントを経て、平成25年6月に公共施設再配置計画を策定し、将来維持できる施設量の試算や目標数値、公共施設のあり方や方向性について定めた。
厚生労働省の基準中にある「有償譲渡及び有償貸付を除く」という部分は、全ての場合にあてはめるのではなく、市町村がその計画をもとに適正であると判断して行う財産処分については、地域の特色や自主性を発揮した地域づくりにつながり、地方分権の一步になると考えられるため、目的外にはあたらず、特例として国庫納付を求めない旨の改正を求める。

根拠法令等

厚生労働省所管一般会計補助金等に係る財産処分承認基準(平成20年4月17日会発第041700号)

厚生労働省所管一般会計補助金等に係る財産処分承認基準においては、地方公共団体が行う有償譲渡等に係る国庫納付額について、事案の内容に応じ、譲渡額を基礎として算定できるとされており、残存年数を基礎とした算定による契約交渉への不利益は回避できると考えられる。

(関連規程)

平成20年4月17日会発第0417001号別添「厚生労働省所管一般会計補助金等に係る財産処分承認基準」第4の1(1)①(ア)等

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

国庫納付額の算定方法は、財産処分承認基準により、残存年数を基礎とした方法だけでなく、事案の内容に応じ譲渡額を基礎として算定できるとされているが、いずれも現行規定では財産処分の方法が有償譲渡・有償貸付である限り、補助金返還は不可避となっている。

市が企業や自治会等に売却活用等を行う際に決める譲渡予定額は、市民説明の観点から不動産鑑定評価額あるいは定率法・定額法による減価償却額等を根拠として定めている実情があり、極端に低い価格、無償に設定できないのが現状である。

したがって、市が行う売却活用にあたっては、不動産鑑定評価額等を根拠とした譲渡予定額での契約交渉となり、譲渡額を基礎として算定する国庫納付額にしても相応の返還額が生じるばかりか、額の確定に時間を要している。結果として、補助金返還を伴っても、なお施設を売却すべきか等の議論に時間を要することになり、事務処理の簡素化が図れないだけでなく、当初の目的を終了した施設を有効活用するにあたり、全体の手続が遅れる大きな要因となっている。

また、交渉の相手方に対しても、財産処分及び国庫納付額が決定しなければ、売却額や引渡し時期を明確に示すことができず、施設の引き渡し後に予定している施設改修のスケジュールが組めない等の不都合を生じさせている現状があり、市としても対応に苦慮している。

今回の提案は、交付税の一本算定を目前に控え、将来に渡って持続可能な財政運営を行うために、合併市町村が公共施設再配置計画に基づき、適正であると判断して行う財産処分については、有償譲渡・有償貸付であっても国庫納付を求めない旨の改正を求める趣旨であるので、再度ご検討いただきたい。

全国知事会からの意見

—

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

所管省からの回答が「現行規定により対応可能」となっているが、事実関係について提案団体との間で十分確認を行い、実現に向けた検討を行うこと。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

有償譲渡等については、補助対象財産の適正な使用を確保する観点から、合理的な範囲で国庫納付を求めることとしているもので、国庫補助金の返還免除を有償譲渡について適用することはできない。

財産処分にかかる円滑な事務手続きについては、担当窓口にも前広にご相談をいただければ、丁寧に対応したい。

(参考)

H20.4.10 補助金等適正化中央連絡会議「補助金等適正化法第22条の規定に基づく各省各庁の長の承認について」

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	341	提案区分	B 地方に対する規制緩和	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	水道資産の有効活用のための有償譲渡に係る国庫補助金返還免除				
提案団体	奈良県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

地方公共団体が補助対象財産を処分する場合、有償譲渡については国庫納付に関する条件を付さず承認することができず、国庫補助金の返還が免除されないところ、水道資産の有効活用のため、国庫補助金の返還免除を有償譲渡についても適用できるようにする。

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【現状】
奈良県では平成23年12月に「県域水道ビジョン」を策定し、県営水道と市町村水道が共同して水道資産（施設、人材、財務、技術力）の最適化を図る「県域水道ファシリティマネジメント」に取り組んでいるところ。水需要の減少により、利用が見込めなくなった県営水道の保有している水道水源を、県営水道供給エリア外で水道水源が不足している市町村水道に有償譲渡して、県域水道全体で有効活用の検討を行っている。

【支障事例】
運営主体が異なるのみで、譲渡後も同じ水道目的に使われるにもかかわらず、「厚生労働省所管一般会計補助金等に係る財産処分承認基準」から、県営水道の水源確保を目的とした国庫補助金の返還が必要となっている。このため、水利権を譲渡する県営水道は、譲渡先の市町村に対し返還する国庫補助金相当額を請求することになり、市町村は新たに国庫補助金の申請手続きが必要になる。

【改正の必要性】
県営水道が水源の不足する市町村に有償で水利権を分轄譲渡しても、国や県に返還額を支払うのみで、不当利得は一切ないことから、「国庫納付を求めない財産処分」に相当すると考える。県営水道の水源確保を目的とする国庫補助金の返還が不要であれば、県営水道から水利権の譲渡先である市町村に対し国庫補助金返還相当額の請求は不要であり、市町村も国庫補助金申請の必要がなくなることから、財産処分に係る手続きの簡素化となる。この規制緩和が実現することにより、人口減少社会に直面する水道事業の抜本的構築に向けて、水道資産の最適化をスムーズに進めることが可能となる。

根拠法令等

「厚生労働省所管一般会計補助金等に係る財産処分承認基準」第3の1(1)

有償譲渡等については、補助対象財産の適正な使用を確保する観点から、合理的な範囲で国庫納付を求めることとしているもので、水道資産に関して国庫補助金の返還免除を有償譲渡について適用することはできない。

(参考)

H20.4.10 補助金等適正化中央連絡会議「補助金等適正化法第22条の規定に基づく各省各庁の長の承認について」

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

1. 有償譲渡

水道資産の中でも、水利権の資産譲渡は適正な価格による有償譲渡が原則であり、県営水道としての不当利得は生じない。

平成3年の岡山市から吉井川広域水道企業団への水利権を含む水道資産の財産処分においては、有償譲渡でありながら国庫補助金の返還は免除されている。

厚生労働省でもアセットマネジメントやダウンサイジングなど、資産の有効活用を重要視されており、平成20年度の財産処分の承認基準は、そのような趣旨で改正されているものと思われる。

2. 水道資産の有効活用

今回の県営水道から各市町への水利権の有償譲渡の取組は、これまでの県営水道の事業投資効果を発揮させるとともに、長年にわたり水源問題で悩み続けてきた各市町の課題解決に向け、現状を放置せず、より積極的に資源の有効活用を進めていこうとするものである。

つまり、同じ水道目的で、水利権を必要とする各市町(行政主体)に対し、県営水道で余剰になる水源という水道資産を引き継ごうというものである。

以上、1. 2より、有償譲渡による水利権の財産処分を行う場合、国庫補助金についても県営水道から市町に引き継ぎ、補助金の国庫納付を求めないものとして、承認基準の特例として認められるべきである。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

提案団体の意見を十分に尊重されたい。

岡山市の事例は受益者が同一であることから、補助事業の引き継ぎとして、個別に国庫納付を求めないものとしたものである。奈良県の場合、受益者が異なるという点で補助目的も変わり、補助事業の引き継ぎと言えず、補助対象財産の適正な使用を確保する観点から、国庫補助金の返還免除を有償譲渡について適用することはできない。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	900	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうちセーフティネット支援対策等事業費補助金(地域福祉等推進特別支援事業の小地域福祉活動推進事業)について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】
国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。
特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。
については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】
埼玉県の地域福祉の推進と密接な関係があるので、県で一体的に実施した方がより効果的であるため。

根拠法令等

セーフティネット支援対策等事業費補助金交付要綱

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

当該補助金は地域社会のセーフティネットを強化するため、福祉課題の解決を目指す先駆的・試行的取組を補助対象としているものであり、都道府県の裁量により負担する対象や負担割合を定めるような仕組みとすることは不可能である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

地域社会のセーフティネットの支援はどの自治体にも必要な事業であり、県の地域福祉の推進と密接な関係がある。また、都道府県ごとに先駆的・試行的な事業を判断することで、より地域の実情に応じた効果の高い事業を実施できるので、都道府県に移譲すべきである。

例えば、埼玉県には夏の気温が他の地域よりも高温となる地域がある。その地域では、熱中症対策の事業を行う際に、あわせて見守り活動などを行っている。こうした取組は、地域が政策を総動員して対応することが必要であるが、地域の実情に精通した総合行政主体である都道府県は、福祉・保健医療に限らず、産業振興・まちづくり・環境政策など様々な地域の課題に市町村や住民・企業等と連携して取り組んでおり、幅広い施策との連携がしやすい。

このため、地域の特性に応じた取組が必要な本件補助事業は、地域の実情をより理解している都道府県に一元化した方がより効果的に事業を実施することができる。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

セーフティネット支援対策等事業費補助金については、補助金という性質上、国費の適正な用途を担保する観点から、交付要綱等に基づき、一定の政策目的に応じた実施主体や補助対象、補助率を定めているものであり、これらを完全に都道府県の裁量に委ねることは一般財源化に他ならず、ご提案への対応は困難である。

なお、ご指摘の事例については現場に近い市町村が国の補助金等を組み合わせて活用し、政策を連携することで対応可能である。

また、全国市長会も同様に、本提案に対して慎重なご意見である。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	901	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうち次世代育成支援対策施設整備交付金(児童館関係)について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】

国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。

特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。

については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】

県の少子政策事業と密接な関係があり、県として市町村の整備動向を把握する必要があるため。

根拠法令等

児童福祉法35条第3項、第40条
次世代育成支援対策施設整備交付金交付要綱

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

次世代育成支援対策施設整備交付金は、三位一体改革による補助金改革の一環として、従来の施設毎の補助から、自治体が作成する整備計画に対する交付とすることにより、計画の範囲内であれば、各自治体の自由な裁量に任せ、自主性・裁量を尊重した柔軟な執行を可能としたものである。

また、次世代育成支援対策推進法において国が交付金を交付することを既定していることから、都道府県に財源・権限を委譲することは困難である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

総合的な行政主体である都道府県は市町村や関係団体等との関係が密接であり、地域の実情や課題に精通している。

次世代育成支援対策施設整備交付金は、都道府県の少子政策事業等と密接な関係があるので、都道府県で一体的に実施した方が地域の実情に応じてより効果的に事業展開ができるので、都道府県へ移譲すべきである。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

次世代育成支援対策施設整備交付金は、次世代育成支援対策の推進を図る上で、次世代育成支援対策推進法(以下「法」という。)第8条第1項に基づき策定された市町村行動計画等に定められた措置の実施に要する経費に充てるため、法第11条の規定により国が交付する交付金であることから、都道府県に財源・権限を委譲することは困難である。

また、市町村が市町村行動計画の策定等を行った場合は、法第8条第5項により、都道府県に提出しなければならないこととされているほか、都道府県は、法第9条第8項により、都道府県行動計画の策定及び計画に基づく措置の実施に関して特に必要があると認められるときは、市町村に対して調査を実施するための必要な措置を求めることができると規定されていることから、都道府県において、市町村の整備動向を把握することは可能である。

なお、本交付金の執行等に当たって、国から補助金等に係る予算の執行の適正化に関する法律等に基づく事務委任を受けることにより、各市町村が国に行う交付申請額等も把握することも可能である。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	902	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうちがん検診推進事業（女性特有のがん検診推進事業）について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】
国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。
特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。
については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】
県により地域の実態に応じた事業とした方が受診率の向上が図れる。

根拠法令等

感染症予防事業費等国庫負担(補助)金交付要綱

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

厚生労働省では、受診率の向上を図るため、平成21年度から子宮頸がん、乳がん検診の無料クーポンを配布するための費用を、健康増進法に基づく健康増進事業として市区町村が実施するがん検診に上乗せする形で国から市区町村へ1/2補助しており、都道府県が補助対象や補助率等を決定することは適さない。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

総合的な行政主体である都道府県は市町村や関係団体等との関係が密接であり、地域の実情や課題に精通している。
また、がん検診推進事業は、都道府県の地域福祉事業と密接な関係があるので、都道府県で地域の実情に応じた事業とした方がより効果的な事業展開が可能となり、がん検診受診率の向上につながるので、都道府県へ移譲すべきである。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】
市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

地域の実情を踏まえ市区町村が策定した実施計画書に基づいて、予算の範囲内で国から市区町村へ1/2補助する事業であり、実施計画書については、地域の実情や課題に精通している各都道府県を通じて提出いただいていることから、各都道府県による手挙げ方式等の実施は不要である。

なお、都道府県におかれては、都道府県がん対策推進計画の各種目標等の実現・達成に向けて、地域の実情等を踏まえ、がん検診実施体制等の強化に資する事業等について、都道府県健康対策推進事業を積極的に活用されたい。

また、全国市長会からも慎重に検討を行うべきであるとの意見が出ている。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	903	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうちセーフティネット支援対策等事業費補助金(安心生活基盤構築事業)について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】
国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。
特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。
については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】
埼玉県の地域福祉の推進と密接な関係があるので、県で一体的に実施した方がより効果的であるため。

根拠法令等

セーフティネット支援対策等事業費補助金交付要綱

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

当該補助金は地域社会のセーフティネットを強化するため、孤立防止のための見守りや生活支援などの先駆的・試行的取組を補助対象としているものであり、都道府県の裁量により負担する対象や負担割合を定めるような仕組みとすることは不可能である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

地域社会のセーフティネットの支援はどの自治体にも必要な事業であり、県の地域福祉の推進と密接な関係がある。また、都道府県ごとに先駆的・試行的な事業を判断することで、より地域の実情に応じた効果の高い事業を実施できるので、都道府県に移譲すべきである。

例えば、埼玉県は高度経済成長期に大量の住宅供給が行われ、大規模団地が多く存在しており、そこでは、急激に高齢化が進んでいる。これに対し、団地内での活動に焦点をあてたサロン活動や住民同士の支え合い活動などが始まってきている。こうした取組は、地域が政策を総動員して対応することが必要であるが、地域の実情に精通した総合行政主体である都道府県は、福祉・保健医療に限らず、産業振興・まちづくり・交通政策など様々な地域の課題に市町村や住民・企業等と連携して取り組んでおり、幅広い施策との連携がしやすい。

このため、地域の特性に応じた取組が必要な本件補助事業は、地域の実情をより理解している都道府県に一元化した方がより効果的に事業を実施することができる。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

セーフティネット支援対策等事業費補助金については、補助金という性質上、国費の適正な使途を担保する観点から、交付要綱等に基づき、一定の政策目的に応じた実施主体や補助対象、補助率を定めているものであり、これらを完全に都道府県の裁量に委ねることは一般財源化に他ならず、ご提案への対応は困難である。

なお、ご指摘の事例については現場に近い市町村が国の補助金等を組み合わせて活用し、政策を連携することで対応可能である。

また、全国市長会も同様に、本提案に対して慎重なご意見である。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	904	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうち地域生活支援事業費補助金について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】
国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。
特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。
については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】
国が補助した額の1/2を県も別途補助しているため、県に移管すれば二重行政の解消になる。

根拠法令等

地域生活支援事業実施要綱

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

当該補助金は、障害者総合支援法に基づき障害者等の福祉の増進を図るために要した費用について補助するものであることから、都道府県の裁量により負担する対象や負担割合を定めるような仕組みとすることは不可能である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

地域生活支援事業費補助金は全市町村が対象となっている補助金であり、県の独自補助と一括して事務手続を実施することができるよう、都道府県に移譲すべきである。

地域生活支援事業については、国の地域生活支援事業実施要綱で市町村及び都道府県の実施する事業内容が定められており、さらに障害者総合支援法において、「都道府県は、予算の範囲内において、市町村が支弁する費用のうち、百分の二十五以内を補助することができる。」とされている。これを踏まえ、本県においても「埼玉県地域生活支援事業費補助金交付要綱」を定め、国補助とは別個に市町村に対する補助制度を設けているものである(補助対象は同一である)。

このため、補助対象が同一であるにもかかわらず、市町村は、国と県に対してそれぞれ補助金交付申請の作成・提出、支払請求、実績報告、検査受検などを行うことが必要であるため、事務が煩雑である。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

当該補助金は、障害者総合支援法に基づき障害者等の福祉の増進等を行う事業の費用について補助することとしているものであり、全自治体で実施することが必要なものについては、必須事業として自治体における事業実施状況も勘案して国がその実施に必要な費用を補助している。今後も必須事業の着実な実施を支援していく必要があり、事務手続上の理由から都道府県に事務を移譲することは困難である。

なお、全国市長会も同様に、本提案に対して慎重なご意見である。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	905	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうち障害者自立支援給付費国庫負担金交付要綱について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】
国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。
特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。
については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】
国が補助した額の1/2を県も別途補助しているため、県に移管すれば二重行政の解消になる。

根拠法令等

障害者自立支援給付費国庫負担金交付要綱

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

当該国庫負担金は、障害者総合支援法に基づき居宅介護等を提供した場合に要する費用について負担するものであるから、都道府県の裁量により負担する対象や負担割合を定めるような仕組みとすることは不可能である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

障害者自立支援給付費国庫負担金事業は全市町村が対象となっている負担金であり、県の独自負担金と一括して事務手続を実施することができるよう、都道府県に移譲すべきである。

障害者自立支援給付費国庫負担金事業については、国の障害者自立支援給付費国庫負担金交付要綱で市町村及び都道府県の実施する事業内容が定められており、さらに障害者総合支援法において、「都道府県は、予算の範囲内において、市町村が支弁する費用のうち、百分の二十五以内を補助することができる。」とされている。これを踏まえ、本県においても「埼玉県障害者自立支援給付費国庫負担金交付要綱」を定め、国の負担とは別個に市町村に対する負担金制度を設けているものである(対象は同一である)。

このため、対象が同一であるにもかかわらず、市町村は、国と県に対してそれぞれ負担金交付申請の作成・提出、支払請求、実績報告、検査受検などを行うことが必要であるため、事務が煩雑である。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

当該国庫負担金は、障害者総合支援法に基づき居宅介護等を提供した場合に要する費用について負担するものであるから、都道府県の裁量により負担する対象や負担割合を定めるような仕組みとすることは不可能である。

なお、全国市長会も同様に、本提案に対して慎重なご意見である。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	906	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうち働く世代の女性支援のためのがん検診推進事業について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】

国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。

特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。

については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】

県により地域の実態に応じた事業とした方が受診率の向上が図れる。

根拠法令等

感染症予防事業費等国庫負担(補助)金交付要綱

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

厚生労働省では、受診率の向上を図るため、平成21年度から子宮頸がん、乳がん検診の無料クーポンを配布するための費用を、健康増進法に基づく健康増進事業として市区町村が実施するがん検診に上乗せする形で国から市区町村へ1/2補助しており、都道府県が補助対象や補助率等を決定することは適さない。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

総合的な行政主体である都道府県は市町村や関係団体等との関係が密接であり、地域の実情や課題に精通している。
また、がん検診推進事業は、都道府県の地域福祉事業と密接な関係があるので、都道府県で地域の実情に応じた事業とした方がより効果的な事業展開が可能となり、がん検診受診率の向上につながるので、都道府県へ移譲すべきである。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】
市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

地域の実情を踏まえ市区町村が策定した実施計画書に基づいて、予算の範囲内で国から市区町村へ1/2補助する事業であり、実施計画書については、地域の実情や課題に精通している各都道府県を通じて提出いただいていることから、各都道府県による手挙げ方式等の実施は不要である。

なお、都道府県におかれては、都道府県がん対策推進計画の各種目標等の実現・達成に向けて、地域の実情等を踏まえ、がん検診実施体制等の強化に資する事業等について、都道府県健康対策推進事業を積極的に活用されたい。

また、全国市長会からも慎重に検討を行うべきであるとの意見が出ている。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	907	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうち障害児施設措置費(給付費等)国庫負担金について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】
国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。
特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。
については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】
国が補助した額の1/2を県も別途補助しているため、県に移管すれば二重行政の解消になる。

根拠法令等

障害児施設措置費(給付費等)国庫負担金交付要綱

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

当該国庫負担金は、児童福祉法に基づき市町村が支弁した障害児通所給付費等の支給に要する費用について負担するものであることから、都道府県の裁量により負担する対象や負担割合を定めるような仕組みとすることは不可能である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

障害児施設措置費(給付費等)国庫負担金事業は全市町村が対象となっている負担金であり、県の独自負担金と一括して事務手続を実施することができるよう、都道府県に移譲すべきである。

障害児施設措置費(給付費等)国庫負担金事業については、国の障害児施設措置費(給付費等)国庫負担金交付要綱で市町村及び都道府県の実施する事業内容が定められており、さらに児童福祉法において、都道府県は四分の一を負担することとされている。これを踏まえ、本県においても「埼玉県障害児施設措置費(給付費等)国庫負担金交付要綱」を定め、国の負担とは別個に市町村に対する負担金制度を設けているものである(対象は同一である)。

このため、対象が同一であるにもかかわらず、市町村は、国と県に対してそれぞれ負担金交付申請の作成・提出、支払請求、実績報告、検査受検などを行うことが必要であるため、事務が煩雑である。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

当該国庫負担金は、児童福祉法に基づき市町村が支弁した障害児通所給付費等の支給に要する費用について負担するものであることから、都道府県の裁量により負担する対象や負担割合を定めるような仕組みとすることは不可能である。

なお、全国市長会も同様に、本提案に対して慎重なご意見である。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	908	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうち介護保険事業費補助金について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】

国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。

特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。

については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】

事業実施に際して地域の実情を反映させる必要がある。全国一律の基準ではなく、国よりもその地域の実情を把握している県が行ったほうが、地域に即した効果的な補助が期待できる。

根拠法令等

介護保険事業費保険事業費補助金交付要綱

当該補助金は、介護保険制度の円滑な施行に資することを目的に、介護認定審査会委員の研修事業など全国一律に補助を行うことが適切な事業や、全国的に先進的な事業に対して補助金を支給するものであり、都道府県の裁量で補助の対象や助成率を決定するものになじまないものである。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

本事業は、市町村における認知症施策の推進などが対象となっており、県内の全63市町村(平成25年度)に交付されていた。

埼玉県としても認知症高齢者等の権利擁護の施策を推進しており、成年後見人制度の普及を進めているところである。しかし、本事業のうちの「市民後見推進事業」は「市民後見人」を主対象とした事業であり、成年後見制度全般に関する事業の展開には使いにくい。

この事業の財源、権限が県へ移譲されれば、県の政策に合わせた内容とすることができ、成年後見制度のより一層の普及が進められる。

全国一律の補助以外のものであっても、それらは既に各地域において取り組んでいたり検討したりしているものが少なくなく、国が全国的な視点から先進事業として採択しなくても、都道府県単位で地域の実情に合わせて採択の判断をすれば足りるものである。

都道府県は地域の実情に精通した総合行政主体であり、福祉・保健医療・産業振興・まちづくり・教育・環境など様々な地域の課題に市町村や住民・企業等と連携して取り組んでいる。本事業が対象とするような取組は、幅広い施策との連携がしやすく、より効果的に事業を実施することができる都道府県に移すべきである。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】
市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

市民後見推進事業は、認知症高齢者や一人暮らし高齢者の増加に伴う成年後見制度の需要の増大に対応するため、弁護士などの専門職のみでなく、市民を含めた後見人も後見等の業務を担えるよう、市町村(特別区を含む)で市民後見人を確保できる体制を整備・強化し、地域での市民後見人の活動を推進する取組を支援するものであり、「成年後見制度全般に関する事業の展開」を目的とするものではない。

全国的に先進的な事業に対して補助金を支給するものについては、事業が全国的に普及したと認められる場合は、補助事業を廃止する等の見直しを随時検討していく性質のものであるため、「既に各地域において取り組んでいたり検討してたりしている」からといって、都道府県に権限・財源を移譲することが適当であるとは言えない。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	909	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうち紹介予定派遣活用型正社員就職応援事業(通称:若者キャリア応援制度)について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】
国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。
特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。
については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】
埼玉県では平成22年度から緊急雇用創出基金を活用して同種の事業を実施してきた。この事業は若年者の正規雇用促進とともに、県内中小企業への人材供給、企業における人材育成支援という側面を併せ持っている。
新卒未就職者の状況は、地方の実情がそれぞれ異なることから、事業ノウハウや実績を有する県が一元的に実施することが望ましい。
特に埼玉県の場合は、ハローワーク浦和就業支援サテライト(若者コーナー)を活用し、本事業を必要とする若者に対し直接アプローチすることが可能である。

根拠法令等

紹介予定派遣活用型正社員就職応援事業実施要領

各府省からの第1次回答

回答区分 C 対応不可

当該事業は、労働市場のマッチング機能強化を目的に、平成28年度末までを事業実施期間として、民間人材ビジネスの創意・工夫を活かしてビジネスモデルを構築・普及するためのモデル事業であり、都道府県への財源・権限の移譲は不相当である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

若者の就業支援は中小企業の人材確保と表裏一体の関係にあり、産業振興と雇用の両面からアプローチが可能な総合行政主体である都道府県の方が、より効果的に実施できる。

また、産業振興やこれに伴う新卒採用の動向等は地域ごとに情勢が大きく異なることから、若年就業支援については地域事情に精通した地方自治体が主体的に実施することが望ましい。

なお、当該事業を「民間人材ビジネスの創意・工夫を活かしてビジネスモデルを構築・普及するためのモデル事業」と位置付けているが、民間ビジネス業界と連携した就業支援は、既に各地方自治体が国に先んじて実施しているところであり、モデル事業の実施を待たず、直ちに本格的展開が可能である。

以上の点から、当該事業の財源・権限を速やかに都道府県に移譲すべきである。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

各府省からの第2次回答

回答区分 C 対応不可

当該事業は、平成25年度補正予算において、緊急人材育成・就職支援事業臨時特例交付金(以下「基金」という。)として措置され、既に基金造成団体に対して全額交付済みである。

また、当該事業は、実施事業者の採択を平成26年度末までとしており、同年度中に開始したものについて、平成28年度まで実施事業者に対し事業経費を支給するものである。

このことから、当該事業の財源・権限を都道府県に移譲することは不相当である。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

記載なし

平成26年 地方分権改革に関する提案募集 提案事項

厚生労働省 最終的な調整結果

管理番号	910	提案区分	A 権限移譲	提案分野	その他
提案事項 (事項名)	都道府県を介さない国の補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)について、都道府県への財源・権限の移譲				
提案団体	埼玉県				
制度の所管・関係府省	厚生労働省				

求める措置の具体的内容

「空飛ぶ補助金」のうち事業所内保育施設設置・運営等支援助成金について、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること

具体的な支障事例、地域の実情を踏まえた必要性等

【制度改正の必要性等】
国が都道府県を介さずに市町村や民間事業者等へ直接交付する補助金(いわゆる「空飛ぶ補助金」)は、地方の実情が反映されない恐れがあるばかりか、国による地方への過度な関与や二重行政の拡大につながるなど、地方分権改革に逆行するものである。
特に中小企業支援やまちづくりなどの施策は、都道府県の関与を強め、補助対象、補助率等を地方の裁量で決定するとともに、都道府県等が実施する事業との連携を図ることによって、地方の実情に応じたより効果の高い事業とすることが必要である。
については、「空飛ぶ補助金」のうち、中小企業支援やまちづくりなどの地域振興に資するものは、都道府県へ財源・権限を移譲し、都道府県から市町村や民間事業者等へ補助する制度とすること。

【地方移管を求める理由】
同種の事業を県も行っているため。県に移管すれば二重行政の解消になる。

根拠法令等

両立支援等助成金支給要領

事業所内保育施設設置・運営等支援助成金を含む、両立支援に取り組む事業主への助成については、労働協約又は就業規則に育児休業について規定していることや、次世代育成支援推進法に基づく一般事業主行動計画を策定し届け出ていること等を支給要件としており、育児を行う労働者が働き続けやすい雇用環境の整備を図るという目的を効果的に達成するためには、関係法の施行業務を行う機関において、両立支援制度に関する事業主への指導等と一体的に行われることが必要である。その財源は国が財政責任を負っている保険者である雇用保険二事業の保険料であり、助成金の企画運営責任、保険の財政責任を一貫して担うべきであるとともに、全国統一の要件の下で公平に支給する必要があることから、都道府県労働局雇用均等室で実施することが必要である。

各府省からの第1次回答を踏まえた提案団体からの意見

働きやすい環境を作るための両立支援への取組については、本県においても「多様な働き方実践企業の認定制度」を設け、就業規則への育児休業等の規定や一般事業主行動計画の策定などを推進している。また本県では県単独事業により、企業内保育所の整備に対する助成も行っている。本県の取組と、都道府県労働局の取組は極めて似通っており、県内事業所からも困惑の声が聞かれるところである。また一方で、国のくるみんの認定や、事業所内保育施設設置・運営等支援助成金制度は、県内の大半を占める中小企業にとっては、要件が厳しく、活用しがたい状況がある。都道府県は、労働分野だけではなく、環境、福祉、公共工事等様々な形で県内事業所とかかわり、状況を把握しているため、財源と権限の移譲を受けることにより県内事業所の実情に即した制度の運用と、より効率的な働きかけが可能となる。家庭と仕事の両立ができる働きやすい環境を整備するという目的は同じであるので、二重行政を解消し、効率的な行政運営を図るために、県内の実情をよく理解している都道府県に権限と財源を移譲していただきたい。

全国知事会からの意見

手挙げ方式や社会実験による検討を求める。

全国市長会・全国町村会からの意見

【全国市長会】

市町村への交付分については、国の関与とは別に、都道府県の関与が新たに加わることや、申請等に係る事務手続きの増加等への懸念もあることから、慎重に検討を行うべきである。

育児・介護休業法の事業主の義務の履行確保のため、国は事業主に対して報告の徴収並びに助言、指導及び勧告を実施することが可能とされており、1次回答のとおり、事業主への指導と助成金の支給による事業主への援助は一体となって都道府県労働局において実施される必要がある。

また、事業所内保育施設設置・運営等助成金は国が財政責任を負っている保険者である雇用保険二事業の保険料であり、助成金の企画運営責任、保険の財政責任を一貫して担うべきであるとともに、全国統一の要件の下で公平に支給する必要がある。

さらに、「二重行政になる」との意見に関しては、自治体が支給する助成金について、両立支援等助成金との併給調整をかける場合、自治体から労働局に照会があった場合は、当該事業所の支給状況について情報提供することとしている。

なお、全国市長会も同様に、本提案に対して慎重なご意見である。

平成26年の地方からの提案等に関する対応方針(平成27年1月30日閣議決定)記載内容

4【厚生労働省】

(18) 事業所内保育施設設置・運営等支援助成金

助成金の支給決定をした事業主の名称等を都道府県に通知することにより、国と都道府県との連携を促進する。